現代インド研究　第3号 23–26頁　2013年
Contemporary India, Vol. 3, 2013, pp. 23–26

『現代インド研究』第3号特集の趣旨

国際関係のなかのインド

上田　知亮

かつてインドは「眠れる象」と揶揄され、国際政治や世界経済における存在感が非常に稀薄であった。1947年に独立したインドは国家主導の社会主義的計画経済体制による経済運営を行ったが挫折し、長きに亘って「ヒンドゥー的経済成長率」とすら呼ばれる低成長の時代を経験することになった。輸入代替工業化と保護主義に基づく閉鎖的な経済体制は経済を停滞させるだけでなく、インドの国際経済との繋がりを著しく細くした。世界経済のなかで埋没したインドは、バンドン会議に代表される非同盟運動や印パ戦争、中印国境紛争といった幾つかの例外を除けば、国際政治の舞台においても忘れ去られかけた存在であった。

だが本誌第1号が特集テーマにも掲げた「成長」の時代を迎えると、政治・経済を始めとする様々な領域でインドは注目を集め、国際社会における存在感を急速に回復した。インドの成長がどの時点で始まったのか、何が最も重要な契機であったのかに関しては、研究者の間でも議論が続いているが、21世紀に入ってインドが政治・経済大国への途を着実に歩んでいることについては、（少なくとも現時点では）否定できないであろう。この大国化の動きと歩調を合わせて、国際関係のなかのインドの重要性も高まっている。中国と並ぶ（そして遠くない将来に中国を凌ぐ）巨大市場を抱えるインドへの投資は、世界金融危機の影響を受けつつも増加基調にあり、インドの成長を自国の経済発展に取り込みたい先進各国首脳の「インド詣」とも言える現象すらみられる。他方インド資本の海外展開も勢いを増しつつあり、インド企業による欧米企業の買収・合併も珍しくない。インド経済は世界経済の不可欠な柱になっているのである。

こうした経済成長は国際政治におけるインドの抬頭をもたらしている。国連安全保障理事会の常任理事国入りを目指す動きや、インド洋海域における中国との政治的・軍事的角逐、NPT（核不拡散条約）批准抜きでのアメリカなど欧米諸国との民生用原子力協力協定締結、こうした幾つかの動向を一瞥しただけでも、インドが国際政治の檜舞台で重大な役割を既に果たしていることが看て取れる。同じことは主要国際会議の構成からも言える。グローバル化や新興国の発展、そしてそれに伴う先進国の相対的な影響力低下は国際政治・経済に関する協議の姿を大きく変容させた。もはやG7（やG8）で気候変動や金融危機といった世界的問題について決定を下すことはできない。下したとしても殆ど意味はない。中国やインドを引き込んだG20が国際問題協議の中心となっていることはそうした現状を象徴している。

それに加えて、文化面でもインドの影響力が増している。2000万人とも3000万人とも言われる

インド系移民は欧米諸国や東南アジア、中東湾岸諸国など世界各地に居住しており、数世代に亘ってホスト社会と様々な相互交渉を繰り返すなかで、政治・経済のみならず文化や宗教などの分野でも変化の一因となっている。とりわけアメリカやイギリスでは移民人口の多さに加えて、専門職に就く富裕層が比較的多いこともあり、インド系移民の影響力は相当なものになっている。インド資本からの出資でイギリス人監督が製作した映画『スラムドッグ＄ミリオネア』が米国アカデミー賞作品賞など数多くの賞を受賞したという、いまだ記憶に新しい事実は、そうした移民の存在と経済の成長を背景として、文化や娯楽など日常生活の各方面でインドのインパクトが大きくなっていることを示している。

このように現代の国際関係のなかでインドが重要な立場を占めていることは明らかである。だが留意せねばならないのは、それを近年になって初めて顕著になった現象であると看做すべきではないということである。独立以前の植民地期に目を転じてみれば、インドはイギリス帝国を経済的・軍事的に支える柱石であり、国際関係の重要なアクターであった。宗主国イギリスの国際収支をバランスさせる多角的貿易決済機構に必要不可欠な一大経済圏として、インドはイギリス帝国内外と活発に交易を行なっていた。また東はシンガポール、西は東アフリカおよび地中海にまでおよぶ広大な環インド洋地域に派兵されたインド軍がアジアにおけるイギリスの覇権を支え、さらに第一次大戦では 100 万以上の、第二次大戦では 200 万を超える戦力を提供して勝利に貢献した。イギリス本国や帝国各地へのインド人の出稼ぎや移住も 19 世紀後半から目立ち始めた。こうした歴史を回顧するならば、現代インドは一世紀前の国際関係における地位を今ようやく取り戻しつつあるとすら言えるのである。

さらに歴史を遡れば、英仏東インド会社のインドをめぐる鍔迫り合いや、イスラーム諸王朝やアラブ商人のインド進出、東南アジアへのヒンドゥー文化の伝播、そして仏教のアジア諸地域への普及など、インドは多様な交流や接触、遭遇の舞台であり発信地であった。インドおよび南アジア地域は古代から現代に至るまで、ヒト、モノ、カネ、情報が活発に行き交うグローバル・ネットワークの中枢の一つだったのである。

もちろん、現代のグローバル化状況と比較すると、ヒト、モノ、カネ、情報が移動する規模やスピード、範囲は桁違いに小さかった。交通・通信技術の制約からネットワークのフローが極めて限られたものだったことは否定できない。しかしここで特筆したいのは、フローだけではなくストックの観点からもネットワークやグローバル化、国際関係について検討する必要性である。歴史的蓄積を踏まえて初めて、国際的な、或いはグローバルな関係と連鎖のネットワークとインド・南アジア地域との相互作用のダイナミクスを適切に捉えることが可能になる。ネットワークや関係というとフローに関心が集中しがちであるが、ストック（つまり歴史）にも目配りすることで、分析と記述は平面的なものから立体的なものに、単調なものから色彩豊かなものへと変貌を遂げるであろう。

本号のテーマを「国際関係のなかのインド」としたのは如上の現状認識と問題意識からである。「現

代インドの国際関係」ではなく「国際関係のなかのインド」とした趣旨は２つある。第１は、現代インドの国際関係を単なる二国間関係の総和ではなく、多国間ネットワークとして把握する分析視角を明確にするためである。第２は、空間的広がりだけではなく時間的厚みのなかで現代インドを取り巻く国際関係を捉える研究視点を強調するためである。こうした問題設定は「国際関係論」の通例の枠組みを大きく踏み越えた「変化球」であるのだが、本特集に寄せられた諸論考はいずれもこれを見事に打ち返して国際関係論の射程を拡張している。個々の特集論文からは様々な学術的知見を汲み取れるのであるが、ここでは国際関係との関連のみから各論文を簡単に紹介したい。

現代インド地域の成り立ちを考察するうえで歴史的に蓄積された広域ネットワークへの着目が重要であることを鮮明に解き明かしているのが、三田昌彦論文「中世ユーラシア世界の中の南アジア—地政学的構造から見た帝国と交易ネットワーク」である。三田論文は南アジアから中央アジアにかけての広域的な生態環境の変化が交易ネットワークと国家領域の形成に多大な影響を及ぼしたという大きな枠組みを提示し、中世南アジア史を新たな角度から照らし出すとともに、数百年単位の歴史的視野から見て初めて理解できる現代インド・南アジア地域の国際関係の基盤構造を描き出している。

国際関係論が政治と経済に偏りがちであるのに対して、近代インドの宗教思想形成において国際的ネットワークが無視し得ぬ役割を果たしていたことを剔抉したのが、冨澤かな論文「『インドのスピリチュアリティ』とオリエンタリズム—19 世紀インド周辺の用例の考察」である。冨澤論文はヴィヴェーカーナンダを中心に「スピリチュアリティ」概念の形成史を検証することを通じて、グローバルな広がりのなかで様々な宗教思想が相互作用を及ぼしていたことを細密に描写し、「思想の国際関係史」とでも言うべき国際関係論の新たな領野を開拓している。こうしたグローバルな思想連鎖という視点は、今後のインド研究にとって不可欠なものであろう。

近代や植民地期におけるインドの国際関係というとイギリス帝国の版図を中心に考えがちであるが、それに対して従来看過されてきたオランダを中心とするヨーロッパ、英領インド、東アフリカという三極を舞台とする 19–20 世紀転換期の国際関係の姿を紡ぎ出しているのが、金谷美和論文「国際関係のなかのインド染織品—東アフリカのカンガに関わるオランダのサンプル帳新資料から明らかにする捺染布の展開」である。カンガという染織綿製品が繋ぐ国際関係の存在を浮き彫りにした金谷論文の着眼点は、国際関係論や帝国史研究、グローバル・ヒストリーと文化研究を接合し得る極めて魅力的なものである。

現代インドの国際関係においてとりわけ重要な国家アクターがパキスタン、中国、アメリカの３カ国であることは衆目の一致するところであろう。それは換言すれば、印パ関係のみならず中パ関係と米パ関係もインドに少なからぬ影響を及ぼすということである。だがパキスタンを中心に国際関係を考察した研究はまだまだ少ない。本特集に寄稿されたパキスタンの国際関係に関する２本の論文は、こうした瑕疵を埋めて現代インドの国際関係の多面的理解を助けるものである。

井上あえか論文「パキスタンからみる対中国関係」は、近年インド洋海域ならびに南アジアでプレゼンスを高めている中国との関係を中心にパキスタンの国際関係の最新動向を検証することを通じて、冷戦終焉以降流動化してきた南アジアの国際関係が、世界の他地域と同様に、今や固定的な同盟関係を想定できない多極的な様相を呈していることを明らかにしている。これまで長期間に亘って成立してきた全天候型の良好な中パ関係でさえ、こうした潮流のなかで不安定化していく可能性があるという井上論文の指摘は、パキスタンおよび中国を積年の競合国としてきたインドの今後の国際関係をも逆照射しており、現代インド・南アジア地域の国際関係の行方を考えるうえで極めて示唆的である。

他方、アメリカとの関係からパキスタン経済の抱える構造的脆弱性とその政治的影響を考察したのが、小田尚也論文「米パ関係がパキスタン経済に与える影響とパキスタン国民の反米感情」である。対米関係のなかで生み出されたパキスタンの脆弱な経済構造が同国における反米感情昂進の一因となり、それがひいてはアメリカのアフ･パク政策の遂行を難しくしたと論じる小田論文の分析手法は、一国レベルの経済分析と国際政治学を繋ぎ、国内と国外の連結という国際関係論の課題に答えようとする挑戦的なものである。こうした先駆的な分析がインドなど他の南アジア諸国の国際関係の解明にも応用されることを大いに期待したい。

以上５本の論攷を通読すれば、国際関係の観点からインド地域を捉え直す意義と同時に、様々な研究分野から国際関係論にアプローチすることの利点が理解されるであろう。本特集に刺戟を受けて、インドをめぐる国際関係に迫る研究が活発になされることを期待したい。

（『現代インド研究』第３号特集担当編集委員　上田知亮、澤宗則、中溝和弥）